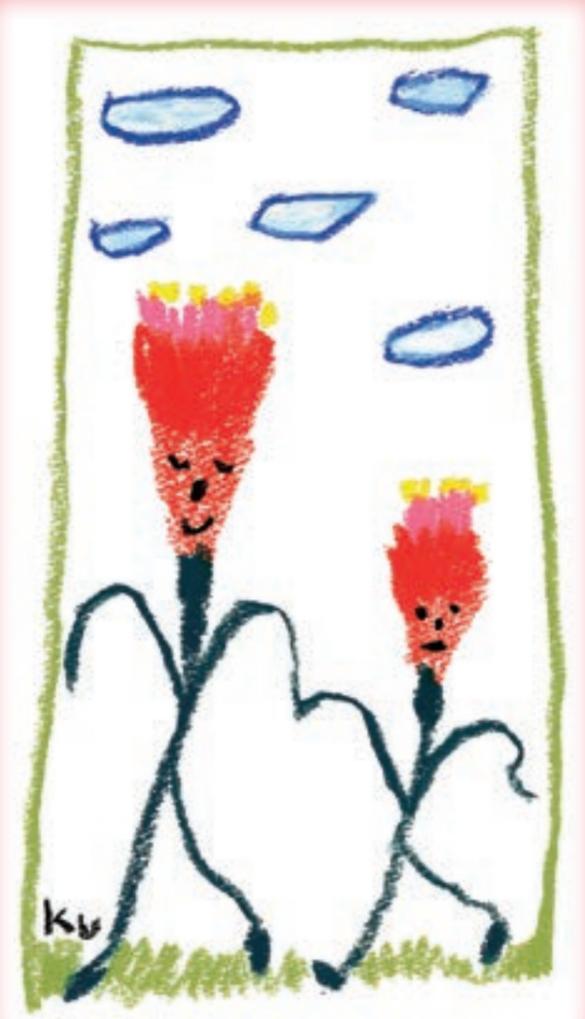


「あなたにあいたくて生まれてきた詩」 コンクール

—ことばはやさしく、こころはふかく—



この詩のコンクールは、北九州の生んだ詩人、宗左近さんとみずかみかずよさんの業績を記念して行われるものです。

「あなたにあいたくて生まれてきた詩」は、宗左近さんの編んだ詩集のタイトルから、「ことばはやさしく、こころはふかく」は、みずかみかずよさんのことばからいただきました。

北九州市立文学館

■表紙絵 黒田 征太郎

表彰式

令和6年12月7日(土)

- 表彰式 14:00~
- 主催者挨拶
- 来賓紹介
- 詩の朗読
- 表彰
- 講評
- 最優秀賞・優秀賞の朗読

受賞作品

小学生の部*

最優秀賞 宗左近賞 水と地面

田島璃玖斗 北九州市立赤崎小学校 5年

最優秀賞 みずかみかずよ賞 おかえり

芳賀 董 国府台女子学院小学校 6年

優秀賞 北九州市長賞 秋色の風

石束 暁 京都教育大学附属京都小中学校 4年

優秀賞 北九州市教育長賞 ポケットに

平賀 はる 京都教育大学附属京都小中学校 4年

優秀賞 北九州市立文学館長賞 ふしぎなこと

才田 唯喜 北九州市立曾根東小学校 2年

中学生の部

最優秀賞 宗左近賞 鯨雲

木村 優衣奈 女子美術大学付属中学校 2年

最優秀賞 みずかみかずよ賞 自分を見失った月

漆畑 美咲 鹿児島純心女子中学校 1年

優秀賞 北九州市長賞 かに

山本 埜乃華 女子美術大学付属中学校 2年

優秀賞 北九州市教育長賞 大人って

高倉 纏 女子美術大学付属中学校 2年

優秀賞 北九州市立文学館長賞 ビニール袋

川野 奈菜 和歌山県立田辺中学校 1年

選考委員

最終選考委員

平出 隆

二次選考委員

大川内 夏樹

岩下 祥子

山崎 純治

内川 龍生

増本 美和

一次選考委員

大川内 夏樹

岩下 祥子

山崎 純治

宗左近

(一九一九〜二〇〇六年)



北九州市戸畑区生まれ。本名は古賀照一。詩人、評論家、仏文学者、翻訳家。東京大学哲学科卒業。詩集『炎える母』で歴程賞を受賞。晩年には『響灘』など行詩の作品を発表。また古今東西を超えた美術評論を行い、著書に『日本の美 その夢と祈り』などがある。また翻訳ではエミール・ゾラ、モーパッサン、ロマン・ロラン、アガサ・クリステイの作品のほか、ロラン・バルト『表徴の帝国』なども手がけた。詩歌文学館賞、チ力夕賞、北九州市民文化賞を受賞し、日本現代詩人会から「先達詩人」の顕彰を受けた。

みずかみかずよ

(一九三五〜一九八八年)



北九州市八幡東区生まれ。詩人、児童文学作家。幼稚園勤務のかたわら、詩や童話を書き始める。その後、児童文学誌『小さい旗』に参加。その作品は、小学校の国語教科書にも採用され、また児童合唱曲にもなった。詩集『いのち』で第五回丸山豊記念現代詩賞を受賞。代表作に『馬でかければ』『きんのストロー』『ごめんねキュービー』など。北九州市民文化賞を受賞。



北九州市立文学館

〒803-0813 北九州市小倉北区内 4-1
TEL 093-571-1505
<https://www.kitakyushucity-bungakukan.jp>



＊宗左近賞＊

水と地面

北九州市立赤崎小学校 五年 田島 璃玖斗

水風船に水を入れた
投げると鳴る水の音
投げると粉々になっている水風船
ふと空を見上げると
持っていた水風船が
太陽に重なって、下におちた
水まみれになった地面
地面が気もちよさそうに
水をのんでいた
それを見たぼくは
「これが夏の始まりだ」と思った

＊みずかみかずよ賞＊

おかえり

国府台女子学院小学部 六年 芳賀 堇

いつまでいるのだろう
こんな飛べなくなった体で
いつまでだったんだろう
息がたえていなかったのは
もういないと思っていた
君の体は腐ってはいない
その体で毎日私を迎えてくれている
どうやってその中に入って
どうやってでれなくなってまで
みんなのことが見たかったの
最後まで一生懸命に生きた蛾は
とうとうガラス張りのエレベーターの隙間で
私を毎日見るようになった
もうきつと見えない目で
何で生きている間に
私は会えなかったんだろう
ただいま

＊宗左近賞＊

鯨雲

女子美術大学付属中学校 二年 木村 優衣奈

ゆずってしまった代表の席
住居の上をマンタが渡る
どうにもならない嫉妬心
車に王女が手をのばす
話すことのない「嫌だった」
足場の透き間を魚群がぬける
添削された原稿用紙
電車の窓を牡馬が駆ける
感情のままに抛った言葉
ビルの間を竜が遊ぶ
見上げた空は すみれ色
私の真上を鯨が通る

＊みずかみかずよ賞＊

自分を見失った月

鹿児島純心女子中学校 一年 漆畑 美咲

夜の夏に出てくる月はたまに自分を見失う
そんなとき月は大きな鏡を見つめている
鏡をはさんで月へ自分がだれかを教えてく
れる小さな者たち。
自分よりうんと小さい者たちだが自分より
うんと大きな大切なことを教えてくれる。
今日のまるくてみんなを照らす夜の光は
安心して眠りについた

平出 隆

小学生の部の宗左近賞は、田島璃玖斗「水と地面」です。風船に水を入れる水風船。それを投げ上げて落ちるまでに太陽が重なる。地面に落ちたあとは、「水まみれになった地面」が「気もちよさそうに」／水をのんでいた。この簡潔な観察記録だけで優れているのですが、素晴らしいのは最後の二行。一挙に場面転換、大きな季節の変わりめを自分の目で見届け、宣言している。

みずかみかずよ賞は、芳賀堇「おかえり」です。毎日帰ってきてつかう、集合住宅のガラス張りのエレベーターの隙間に入った蛾は、そのまま息が絶えている。その蛾は生きている間ではなく死後に、「私」を毎日見るようになった、というのである。最後の行「ただいま」の私に答えるのがタイトルの「おかえり」である。日頃の観察から、それを言葉の作品として仕上げるところまで、細やかな工夫の心が満ちわたっている。

優秀賞の才田いぶき「ふしぎなこと」は、夜の山中でシカと出合いながら、なんと歌を、「ままとうたう」という詩。それ以上の説明がないのでいっそう、「ふしぎなこと」が読者にも感じられて、一緒に歌いそうになります。石東暁「秋色の風」は、なくした名札を木々のあいだの、一枚の落ち葉の下に見つけます。落ち葉を飛ばす秋の風が「名札の上を通っていった」という最終行がいい。平賀はる「ポケット」には、ハナミズキの赤い実をポケットに入れたまま洗濯し、夜、それを取り出し、すっかり変わった実を見つめるその描写が素晴らしい。

中学生の部の宗左近賞は、木村優衣奈「鯨雲」です。日常生活のはしばしでやってくるネガティブな状況。そのたびに突飛なイメージを心に浮かべ、投げやりに、またコミカルに対抗しようとしているようです。最後の一連だけ、「見上げた空は すみれ色」というように救いのある空間が、季節感をもなつて広がります。それでも次には「私の真上を鯨が通る」のです。

みずかみかずよ賞は、漆畑美咲「自分を見失った月」です。「月はたまに自分を見失う」という見方は大変ユニークです。自分を見失った月は鏡を見つめて、自分がだれかを問いかける。すると「小さい者たち」が答えてくれる、という。その月より「うんと小さい者たち」とは、という謎が残りますが、その答えは最後に暗示されています。

優秀賞です。川野奈葉「ビニール袋」は、台風に乗って宙に舞うビニール袋を、「空のクラゲ」として生き生きととらえています。山本埜乃華「か」は、お母さんが三歳の頃、キャンプで眠ろうとしていたとき、「お腹の上を通った／一匹のかに」それは自分だ、という妄想が、自然で面白い。高倉纏「大人って」は、世の中の大人は大人に見えるけれど、実は「子供とほとんど同じ」のではないか、という鋭い視点が愉快です。



© Takashi Mochizuki / © 望月 孝

平出 隆

北九州市門司区生まれ。詩人・作家・多摩美術大学名誉教授。装幀家、造本家としても知られる。一橋大学在学中から詩と詩論を発表しデビュー。1974年に仲間とともに版元・書紀書林を構え、翌年、詩誌「書紀」を発刊。70年代

の詩的ラディカリズムの先端を担う活動を展開。詩誌「胡桃の戦意のために」で芸術選奨文部大臣新人賞、散文作品集「左手日記例言」で読売文学賞、散文集「ベルリンの瞬間」で紀行文学大賞、評伝「伊良子清白」で芸術選奨文部大臣賞、藤村記念歴程賞など受賞多数。また木山捷平文学賞を受賞した小説「猫の客」が2014年、世界的ベストセラーとなった。

＊北九州市長賞＊

かに

女子美術大学付属中学校 二年 山本 埜乃華

母から不思議な話を聞いた

三歳か、そのくらいのころ
波うち際にテントを立てて
キャンプをしたらしい
すこしあたりが暗くなって
ねむろうとした時

お腹の上を通った
一ぴきのかに

それを今でも、鮮明に覚えていると

わたしはこの話がすき

理由は「なんとなく」

あえて言葉にするなら
そのかには、わたしだと思うから

これも理由は「なんとなく」
かにとの共通点はぜんぜんない

しいていうなら、わたしは蟹座ってこと
でも、それが重要だと思ってる

テレビの星座占い

プラネタリウム
父の田舎の夜空

いろんなところで、母の話を思い出す

母のもとに、海からやってきた小さなかに
三十年後に、空で太陽の方を向いていた蟹
そういえば、パパはカニアレルギーだし

偶然と言われればそうだけど

わたしは信じてる

わたしと両親をひきあわせてくれたのは
きつとあのかにだつて

＊北九州市教育長賞＊

大人って

女子美術大学付属中学校 二年 高倉 纏

大人って一体何だろう

泣いたりなんてしない人？

ルールをしっかり守る人？

それなら泣いてた私の両親は

大人じゃないのかもしれない

大人って一体何だろう

正しいことを言える人？

タバコやお酒を買える人？

それなら正しいことがわからない

人は大人じゃないのか

大人って一体何だろう

働くことができる人？

頼らず生きてゆける人？

それなら助け合ってる人達は

大人になれていないのか

大人って一体何だろう

パパやママ？

先生方？

それなら地域の人やお隣さんは

大人と呼べないのだろうか

大人って一体何なのか

わからないまま大人になる

気がついたらなっている

私も大人になつたなら

わからないことが多いだろう

それでも小さい子供のように

色々知っていくはずだ

大人って一体何だろう

もしかするといけないのか？

大人と子供はほとんど同じ

ものかもしれない

＊北九州市立文学館長賞＊

ビニール袋

和歌山県立田辺中学校 一年 川野 奈菜

たい風のある日

ぼくは見た

白いものが

とびたつとこを

足が生えてて

白くつて

くらい空を

とんでいる

やさしいのにおいを

まきながら

ふくらむ

からだは

空のクラゲ

ときどき

じめんにおちるけど

それでも

立って

とんでいく

＊北九州市長賞＊

秋色の風

京都教育大学附属京都小中学校 四年 石束 暁

中間休みふと下を見た
なにかがない
考え考え気づいた
名札がない
あっちやこっちをさがし
つき山の上に行った
そのけしきに足が止まった
木々の真ん中にある名札を見つけた
名札の上に落ち葉が置いてあった
ひゅうつと風で飛んでいった
秋色の風が
名札の上を通っていった

＊北九州市教育長賞＊

ポケットに

京都教育大学附属京都小中学校 四年 平賀 はる

おばあちゃんの家のハナミズキに実がで
きていた。
赤色がまぶしくあざやかだったので、
ポケットに入れた。
その日の夜、
ポケットに実を入れていた事を思い出し、
せんとく物から取り出してきたズボンの
ポケットをさぐった。
ハナミズキの実は、
火花がおわってしまったかのように
黒くなっていた。
外は静まり返り、夜のふかさがまわりをつ
つんだ。

＊北九州市立文学館長賞＊

ふしぎなこと

北九州市立曾根東小学校 二年 才田 唯喜

まつくらなよるにうた
よるのおでかけ
山のなか
シカがでた
うたにつられて
ぼくはままたうたう
もつとおおきく
もつとげんきに
よるの山はぼくたちとシカだけ
「またシカだ」
シカがにげたとんでにげた
うさぎみたいだ
ピヨーンピヨーン
もつとあいたいな
ぼくたちはかえるまで
うたをうたった